

下関西高等学校 進路だより

令和7年3月号 進路指導部

～あの日、どこで何をしていましたか？～

毎年、この時期は同じような文章になっていますが、お許しを。

14年前の3月11日15時頃、君たちはどこで何をしていましたか？と言っても、当時の幼かった君たちにはほとんど記憶が無いかと思います。私はその日、前任校の進路指導室にいました。そして、翌3月12日から始まる国公立大学の後期試験に向け、面接練習をある生徒と切羽詰まりながらやっていました。15時半頃になって、3年生の担任をされている林という若い先生が慌てた表情で進路指導室にやってきて一言「先生、明日の試験はどうなりますか？」と言いました。私は生徒とのやりとりに夢中だったので、林先生が何を言っているか全く理解できず二人はコミュニケーション不調に陥りました。困った林先生は「とにかく事務室に行ってみてください。」と言われました。事務室に行ってみると、テレビ画面に今まで見たことない大津波が宮城県仙台市付近の海岸に押し寄せている映像が目に飛び込んできました。私は現実が全く掴めず言葉を失いました。慌てた私はすぐに隣の校長室に行き林先生と同じように「校長先生、明日の試験はどうなりますか？」と言ったところ、中嶋幸子校長は顔色一つ変えず「あるに決まっているわ。だから、進路指導室に戻って引き続き準備しなさい。」と言われました。私は戻って生徒と一緒に対策をしましたが、当時の記憶は現在もあいまいなままです。翌日の国公立大学後期日程ですが、結局30校は中止となりましたが、生徒達が受験する予定の大学は全部実施されました。

あれから14年の月日が流れました。その後、岩手県久慈市、釜石市、宮古市、大船渡市、陸前高田市、宮城県の気仙沼市、特に前任校の卒業生が復興後のまちづくりに参加している気仙沼市の唐桑半島には4回訪問する機会に恵まれました。今年、ロサンゼルスドジャースに移籍した佐々木朗希投手の母校、岩手県立大船渡高校には被災当時、校長先生として奮闘されていた鈴木晃彦先生に案内をしていただきました。鈴木先生は昨年6月に進路講演会の講師として西高に来ていただいたので、記憶に残っている生徒も多くいるかと思います。これらの場所は何回訪れても気持ちが大きく揺さぶられますし、今回、卒業式を迎える3年生には是非とも1年以内にお金を貯めて、都合をつけて被災地を訪問し、自分に与えられている「いのち」や「生きている時間」について向き合って欲しいと思います。それができたら君たちはさらに素敵な大人になれると思います。

ところで、4回被災地を訪問した中で最も印象に残っているのは最初に訪問した9年前の夏、宮城県立陸前高田高校の生徒達とバスに乗り合わせた時の事です。当時、陸前高田はかさ上げ工事中でダンプカーが土埃をあげてがんがん走り、重機が騒音をたてながら工事をしており「騒がしい。暑い。」で環境は最悪だなと思いました。しかし、そのような状況の中、部活動帰りの生徒達はお互いに顔を見合わせ、屈託のない明るい笑顔を浮かべながら、たわいもない話で盛り上がっていました。これは高校生の単なる日常の風景だったのですが、私は、表現できないほどの困難な状況に直面してきたと想像される高校生達がそれを見せず、明るく振舞っている姿に感動を覚え、震災のことは決して忘れてはいけなさと強く思いました。

では、今回の最後に2011年気仙沼市の階上中学校で震災直後に開催された卒業式の代表生徒の答辞の文章を紹介したいと思いますので、君たちの最高の想像力を働かせて読んでください。文章は裏面に掲載しています。

(裏面につづく)

気仙沼市立階上中学校の卒業式における卒業生代表梶原裕太君の答辞 卒業生代表の言葉

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通り慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。前日の十一日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに…。階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございます。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず、よき社会人になります。私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成二十三年三月二十二日 第六十四回卒業生代表 梶原 裕太

梶原裕太さんの答辞の存在を知ったのは2019年7月気仙沼市にある「震災遺構・伝承館」を訪問した時です。中に入り、しばらく展示を見ながら歩いていると、遠くから明らかに若い男性の声が聞こえてきました。何だろうと近づいていくと、フロアーで映像が流れており、見ると男子生徒が涙をぐっところえながら答辞を力強く読んでいる映像でした。私は震災という強烈な体験をした直後なのに歯をくいしばって前を向こうとする梶原さんの姿に心が大きく揺さぶられました。

西高生は全員、本校入学後、高い目標を掲げて志望校の合格を勝ち取るため、日々の努力を重ね、進路実現に向けて十分な学習能力を身につけてきたと思いますし、その実現に向けて誠実に支援していくことは西高教員のミッションであることは私も十分に自覚しています。しかし、それだけでなく、繰り返しにはなりますが、自分の命、時間についてしっかりと考えられる西高生であって欲しいと思います。

ところで、皆さんが幼い時に起きた三陸沖を震源とするモーメントマグニチュード9の東北地方太平洋沖地震は発生から今年で14年目を迎えます。この地震は宮城県栗原市では震度7を、宮城県、福島県、茨城県及び栃木県の4県では震度6強をそれぞれ観測するなど、国内観測史上最大規模の地震となりました。この地震に伴って発生した高い津波は、東北地方の太平洋沿岸部をはじめとする各地を襲うとともに、福島第一原子力発電所における事故等を引き起こし、東日本大震災と呼ばれています。この地震による被害は、令和3年現在死者1万5900人、行方不明者2、500人以上に上っています。時間の経過とともに復興が進み、日常を取り戻すことができている人が大半となっていますが、まだまだ帰宅困難な状況の中、必死にがんばっている人もいます。この出来事を私たちは決して忘れてはいけません。

(文責・進路指導部・松村)